

所分別と三昧についての一考察

——『秘義分別撰疏』覚え書(4)——

千葉公慈

A Study about Vikalpa and Samādhi —— A Memo about *Vivṛtaguhyārthapīṇḍavyākhyā* (4) ——

Kōji CHIBA

1. 問題の提起

本稿は、『撰大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下MSと略称)に対する注釈書『秘義分別撰疏』(Vivṛtaguhyārthapīṇḍavyākhyā*¹、以下VGPVと略称)をテキストとして扱うものであり、瑜伽行唯識学派におけるアーラヤ識設定の隠された意味とその思想の開示を目的とする。すなわちそのVGPVとして伝えられる僅かな資料の中でも、チベット訳デルゲ版(No. 4052)を底本として継続的に現代語訳*²をすでに3度にわたり試みたわけであるが、これらの試訳によって将来的にはMSに対する側面的理解の一助にしたいと考える。特に唯識思想における真如観を一貫したキーワードとしつつ、MS成立後の唯識学派における思想的背景の遡行によって*³同派の掲げる様々な術語概念をめぐる、如何にその整合性を保たんと解釈せしめるのか、教理上の伝統性と自派の主張との矛盾に揺れ動く言語の密意の問題について、以下に試訳とともに若干の問題点を提示する。

2. 所分別の否定をめぐる重層的理解

前回の考察によれば、VGPVの主張として依他起性における言語活動、すなわち認識判断としての所分別とは、現量と直観智の両者の否定を内容とするものであった。したがって一般相たる真如に対する観察が比量ではなく現量であるという真如観は矛盾している、という他派からの批判は不適切として退け、最終段階においても認識判断は所分別として否定されるべきとの道が開示される。すなわち以下の通りである。

またある観点によれば、遍計所執[性]について欠落が確認できないから*⁴、即ち依他起[性に対して]は自己認識*⁵がある*⁶けれども、同時に決定的に[遍計所執性の欠落が]未確認だからである。[故にMS*⁷における]「この円成実[性]は見られない云々」との論述等が[『唯識三十頌』にも]説かれたのである*⁸。(中略)[更に]如来の[究極的]段階*⁹では、[当然ながら遍計所執性の了知が]出世間の後に獲得された智慧の[把握]対象でもないのである。何故ならば[その段階では]一切の執着が断たれるからであり、一方で所分別(認識判断)もまた執着[というもの](abhiniveśa)によって為されるからである。如来とは、およそ何時如何なる他生(生まれあわせた他の時代)であれ、如来が[如来以外の]他人の心によって把握(執着)される分別(pariccheda*¹⁰)[を断ち切った]場合であれば、その時はまた、無転倒の真実(dekho na nyid, tattva)を本質とするものが[把握]対象となるが、[その対象は]あたかも分別(認識)されるが如く、その様には[把握]対象とはならないであろう*¹¹。(VGPV: 299-a-4~299-b-3)

こうして一般的には理解が困難であろうが、認識判断たる所分別はあくまでも執着というものに基づくという主張によって、如来には執着が無いのだから出世間後得智として認識判断は存在しないとする。換言すれば、基本的に認識判断という言語活動よりも、獲得されるべき体験的境地が優先されることになり、したがって智慧という意味内容が言語活動を離れた存在として、必然的に智慧の実体化へと至る

ことになる。あるいは認識判断の否定が、真如そのものを把握対象とする場合を除外するために、重層的に「凡夫の認識判断（遍計所執）」の否定と「如来の認識判断（依他起）」のそれを区別して説明する構造となっているとするならば、これらの見解からは凡夫には真如を把握出来ないのであるから、瑜伽行体験者のみによって把握対象とされる真如観は一種の苦行主義に依拠する可能性を残すものであり、また経験上に自ずと出現する形態の真如理解は如来蔵思想にも通底するものと指摘し得る。

そこで次項では、所分別を否定した citta の様相から展開される三昧重視の傾向について、VGPV の相当箇所を概観しよう。

3. VGPV 試訳

凡 例

- 1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要なに応じて北京版を利用した。

Der. ed., No. 4052, Ri, 296-b-1~361-a-7
 : Tibetan Tripiṭaka, bstan 'gyur,
 preserved at the Faculty of Letters,
 University of Tokyo,
 SENMS TSAM Vol. 12, 通帙第
 236 (Ri)

Pek. ed., No. 5553, Li, 356-b-7~434-a-8

- 2) 固有名詞ならびに通常音写語として用いられる術語は、カタカナ表記とする。
- 3) 本書のテキスト MS 中にて言及されている部分は、「 」によって示した。
- 4) 重要な術語は、() によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなからうと思われる還元のスンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に () によって示した。
- 5) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は [] によって示した。
- 6) 典籍一般は、『 』によって示した。

- 7) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な箇所も敢えてそのままの表現を残した。

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 300-a-1, Pek. ed, No. 5553, Li, 360-b-5]

【(続) MS 各章の主題について】

[MS 本文第 4 章が完結し、続いて第 5 章の主題である] 「その原因と結果との修習を類別すること」と言われることについて言えば、[大乘の立場にとっては] 主要なものであるから、[まず] ただ結果のみの類別を為し給うたのである。[したがって] 付随的に阿僧企耶劫（無量劫、asaṃkhyeya-kalpa）の類別が示されるべく、[後に] 原因の類別を為し給うことになるだろう。

[MS 本文第 6 章の主題である] 「勝れた戒 [学] (増上戒学、adhiśīla)」と言われることなどは、主要なものであるから、三学を説く [箇所] ののである。付随的には他の [5 つの] 波羅蜜（到彼岸）なども説くのであり、布施 (dāna) や持戒 (śīla) と言われることなどの言葉の区別によって、[MS 本文のように] かくの如く示されるのである。[しかも] 凡そ何時如何なる時であれ、撰衆生戒 (sattvārtha-kriya-śīla) 云々が説かれる時であるならば、その時は [大乘の立場にとっては] 根本的な [箇所] なのである*12。

[MS 本文第 7 章の主題である] 「勝れた心 [学] (増上心学、adhicitta)*13」と言われることなどについて言えば、最初の [初地から第] 三地 [まで] においては、大乘 [の立場] が最も明確に現れている三昧 [が相当するの] である。第四 [地] と第五 [地] と第六 [地] と第七 [地] においては、すべての福德 (punya) を集める三昧 [が相当するの] である。第九 [地] と第八 [地] においては、三昧の王たる賢護菩薩 [の三昧が相当するの] である。第十 [地] においては、首楞嚴 (śūraṅgama) [三昧] や虚空蔵 (ākāśa) [三昧などが相当するの] である*14。

[MS 本文第 8 章の主題である] 「勝れた慧 [学] (増上慧学、adhiprajñā)」云々とは、[大乘の立場に限らず、誰にとっても] 主要なものであるから、[その箇所では] 根本 [無分別智] (maula-nirvikalpa-jñāna) を説くのであって、加行 (prāyogika) と [分別] 後得 [智] (tat-praṣṭhalabdha-

jñāna) の両者は後に説示するのである。

【MS 本文第9章の主題である】「断ずることの殊勝なること (prahāna-viśeṣa)」と言われることなどについて言えば、涅槃には4種類がある。すなわち①有余涅槃と、②無余涅槃と、③自性涅槃と、④同様に無住处涅槃とである*15。その中で、ここでの [前] 三者は声聞等 [の小乗の見解と] 一致するものであるから、[このVGPVでは] 含まれていない (意味が示されていない) が、無住处涅槃は [煩惱障と所知障の] 二つの障害を離れた [真如という意味] に他ならず*16、声聞 [の教義] とは共通するものでない [大乘の教義独自のものである] から、[ここでは] 含まれる (意味される) ののである*17。

【MS 本文第10章の主題である】「智の殊勝なること」と言われることなどの、そこでの法とは、力 (daśa-bala) 等 [の十八不共仏法のこと] である*18。

【MS 第10章の三身説について】

① [そこで三身説について言えば、第一に法身を示す。すなわち] それらの身、すなわち拠り所とは法身 (dharma-kāya) である*19。【MS 本文第10章、第9節にあるように】 真実は清浄なる真如であって*20、何故ならば諸々の仏法はそれ (真如) に依存して生起するからである。【MS 本文の第10章、第7節および第9節に】 「一切 (kūṃ, sarva)」と言われる語もまた、拠り所として一般に認められるのであって、[例えば] 身根の如きであり、積集されたものであるのも眼等 (眼識等の六識) の拠り所だからである*21。またある観点によれば*22、身とは個別相 (自相) そのものであるが、個別相 [を有するもの] であるか故に、法 [たり得るの] である*23。これは身でもあるが、法でもあることによって法身であり、すなわちそれはまた、「清浄なる真如」なのである。「身」と言われるのは、言葉も個別相としても一般に認められているのであり、[例えば] 識身 (認識作用の積集、種類) という特質を有するものの如きである。何故ならば、[いろいろかたちの無い認識作用の働かない] 無色等に関しては、積集なきものだからである。その法身とは智の原因であるから、[章題に示すように] 「智の殊勝なること」にして、真実なる自性身 (svabhāvika-

kāya) である。

② [第二に受用身を示す。すなわち] 如来のすべての智は、ご自身の享受であると考えから、[まず自受用という意味から] 受用身 (sambhoga-kāya) である*24。凡そ何であれ、力等の自性であるものと、凡そ何であれ、諸相 (三十二大人相、dvā-triṃśat-mahāpuruṣa-lakṣaṇa) と随好 (aśīti-anuvyañjana) なるものとして相成ったものであれば、それら両者 (lakṣaṇa-anuvyañjana) とともに如来の智の自性であるから、「智の殊勝なること」なのである。その力 (能力) によって、諸々の菩薩にはそれぞれ諸相と随好等が見られる [という意味] は、凡そ何であれ心と心所が満たされることであれば、実にそのこと [を言うの] であって、他なる受用の必要がある [という他受用の意味] から、受用身なのである*25。

③ [第三に変化身を示す。すなわち] ただ如来の智の力のみによって菩薩は、勝解行 [地] を実践している菩薩と、そして声聞等の相続において、各々に諸相と随好等が顕れているお体は、短時間の中に留まるものであるから変化 [身] (nairmāṇika-kāya) であり、[それはまた] 智の結果であるから「智の殊勝なること」なのである。

【大乘の仏説について】

「諸仏世尊は (buddhabhagavatāṃ)*26」と【MS 序文に】言われたことを説明しようと欲し給うて、[それに続いて] 「大乘が仏説であること (buddha-vacana-tva) として論じられるのである」*27と言われることなどが説かれたのである。何故かと言うならば、凡そすべての声聞乗たることは大乘であると理解される [からであり、] そのことは、かの「仏説が大乘であるとも [明らかに] 論じられる」*28 [と MS 序章4の冒頭に宣言された意味な] のである。したがって声聞乗とは大乘たるその性格としては、仏説ではないのである*29。何故ならば [先述の] 十種の説示 (daśa-sthāna) [されたこと] とはかけ離れたものだからである。[例えば] サーンキヤ等の論典の如きである [から]。

「声聞乗より勝れているものであると為した」*30と【MS 序文3末に】言われていることについて言えば、「仏の言葉は十種類の殊勝なることによって、勝れていると特徴づけられる」と【MS 本文4およ

びその偈頌に] 言われたそのことを示すのである。何故に「声聞乗より [勝れているのか]」とは、[声聞乗においては]「知られるべきものの拠り所 (= ālaya-vijñāna)」等々が [まだ] 完全には示されてはおられないが、その一方で大乘では、[MS 本文第 1 章以下の]「知られるべきものの拠り所」等^{*31} といった、あらゆるすべてのあり方が [完全に] 示されている [のである。] そのために、[MS 序文 3 末に]「声聞乗より勝れているものであると為した」と [主張したの] は、十種の殊勝なることによって、如来のお言葉である殊勝なるものに近づける [という意味な] のである。「最高なるもの (viśiṣṭa-paramatva) であるが故に、更に殊勝なるものとして特徴づけられるのである。どのようにして最高なるものであるのか、たとえば、「最高なるもの」として示されるからである。最高なるものとして示されるそのことは、どのようにしてなのか、たとえば、どのように世尊が菩薩たちに依拠して^{*32} 示されたもの [なのか、というが] 如きに基づくのである。これによって所化 (vineya) が勝れているから、「最高なるもの」であるということが、言葉の主旨である。このように所化という能力によっても、[その] 説示は劣ったものと勝れたものである。例えば凡夫であるが故に、タプッサ (Tapussa) とバドラカ (Bhadraḥ, Bhallika) のためには劣ったもの (下品) が説示されたのであり、聖なるものの段階であることに関して、5つのニカーヤを主題となし給うて中位のもの (中品) [が説示され]^{*33}、菩薩たちを主題となし給うて『般若波羅蜜多 [経]』が 8 種類示され、[虚妄に] 分別されたあらゆる様相を否定する (dgag pa) という観点から、[それは] 最上なるもの (上品) なのである。 (続)

4. VGPV 蔵文

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 300-a-1, Pek. ed, No. 5553, Li, 360-b-5]

[rab tu dkha' ba la sogs pa'i gnas skabs na ni 'bras bu'o.]^{*34} 【Daśa-prakāra-viśeṣa】 (5) de yi rgyu dang 'bras bu sgom par btu dbye zhes bya ba ni gtso bo win pa'i phyir 'bras bu kho na'i rab tu dbye ba mdzad do. zhar la bskal pa grads med pa rnam kyī rnam par dbyed ba bstan par rgyu'i

rnam par dbyed bar mdzad par 'gyur ro. (6) lhag ba'i tshul khirms zhes bya ba la sogs pa ni gtso bo win pa'i phyir bslab ba gsum smos so. zhar la ni gzhan pa rol tu phyin pa rnam kyang smos te. sbyin pa dang tshul khirms zhas bya ba la sogs pa' sgr'i bye brag gis^{*35} de skad du bstan to. gang gi tshe sems can gyi don bya ba'i tshul khirms la sogs pa smos pa de'i tshe ni dngos kho nar yin no. (7) lhag pa'i sems zhes bya ba la sogs pa ni sa dang po gsum la ni theg pa chen por btu snang ba' i ting nge 'dzin to. sa bzhi ba dang lnga pa dang drug pa dang bdun pa dag la ni bsod nams thams cad sdud pa'i ting nge 'dzin to. dgu pa dang brgyad pa la ni ting nge 'dzin gyi rgyal po bzad skyod do. bcu pa la ni dpa' bar 'gro ba dang nam mkha' mdzod la sogs pa'o. (8) lhag pa'i shes rab ces bya ba la sogs pa ni gtso bo yin pa'i phyir dngos gzhi smos te. sbyor ba po dang rjes kyī dag^{*36} ni phyis ston to. (9) spangs pa'i khyad par zhes bya ba la sogs pa la mya ngan las 'das pa ni rnam pa bzhi ste. phung po dang bcas pa dang phung po med pa dang rang bzhin gyis mya ngan las 'das pa dang de bzhin du mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa'o. de la 'dir ni gsum ni nyam thos la sogs pa dang thun mong yin pa'i phyir mig zung gi mig nas pa'i mya ngan las 'das pa de bzhin nyid sgrīb pa gnyis dang bral ba kho na thun mong ma yin pa'i phyir gzung ngo. (10) ye shes kyī khyad par zhes bya ba la sogs pa de la chos ni stobs la sogs pa'o.

【Tri-kaya】 (dharma-kāya) de dag gi sku ste rten ni chos kyī sku'o. de nyid de bzhin nyid yong su dag pa yin te. sangs rgyas kyī chos rnam ni de la rag las te 'byung ba'i phyir ro. kun^{*37} zhes bya ba' i sgra yang rten du grags te. lus kyī dbang po bzhin te. bsags pa nyid yin yang mig la sog^{*38} pa' i rten yin pa'i [Der. ed. 300-b-1] phyir ro. rnam pa gcig tu na sku ni rang gi mtshan nyid kho na yin la rang gi mtsan nyid yin pa'i phyir chos so. 'di ni sku yang yin la chos kyang yin pas chos kyī sku ste. de yang de zhin nyid yong su dag pa yin no. sku zhes bya ba ni sgra yang rang gi bmtshan nyid

du yang grags te. rnam par shes pa'i [Pek ed. 361 -b-1] lus bzhin te. gzugs can ma yin pa rnams la bsags pa med pa'i phyir ro. chos kyi sku de ni ye shes kyi rgyu yin pa'i phyir ye shes kyi khyad par te. de nyid ngo bo nyid kyi sku yin no. (sambhoga -kaya) de bzhin gshags pa'i ye shes thams cad ni nyid kyi longs spyod rdzogs par dgongs pa'i phyir longs spyod rdzogs pa'i sku yin no. stobs la sogs pa'i ngo bo nyid gang yin pa dang mtshan dang dpe byed bzang po nyid du gyur pa gang yin pa de dag kyang de bzhin gshegs pa'i ye shes kyi ngo bo nyid yin pa'i phyir ye shes kyi khyad par yin no. de'i dbang gis byang chub sems dpa' rnams la so sor mtshan dang dpe byad bzang po la sogs par snang ba sems dang sems las byung ba dag la khyab pa gang yin pa de yang gzhan longs spyod rdzogs bar dgos pa'i phyir longs spyod rdzogs pa' i sku yin no.

(nairmānika-kāya) de bzhin gzhags pa'i ye shes kyi dbang kho nas byang chub sems dpa' mos pa spyad pa spyod pa dang nyan thos la sogs pa'i rgyud la so sor mtshan dang dpe byad bzang po la sogs par snang ba'i sku ni yun thung ngur gnas pa' i phyir sprul pa ste. ye shes kyi 'bras bu yin pa'i phyir ye shes kyi khyad par yin no.

[Buddha-vacanatva] sangs rgyas bcom ldan 'das rnams zhes bya ba bshad par bzhed nas theg pa chen po sangs rgyas kyi bka' nyid du brjod pa'o zhes bya ba la sogs pa smos so. ji^{*39} rta zhe na gang dag nyan thos kyi theg pa nyid theg pa chen po yin no zhes bya bar rtogs pa de dag ni sangs rgyas kyi gsung de theg pa chen po yin par yang brjod do. de'i phyir nyan thos kyi theg pa ni theg pa chen po nyid du sangs rgyas kyi bka' ma yin te. rnam pa bcu bstan pa dang bral ba'i phyir grangs can la sogs pa'i bstan bcos^{*40} bzhin no. nyan thos kyi theg pa las khyad par du byas pa zhes bya ba ni gsung khyad par rnam pa bcus khyad par du [Der ed. 301-a-1, Pek ed. 362-a-1] 'phags pa zhes bya ba de ston te. gang gi phyir nyan thos kyi theg pa las ni shes bya'i gnas la sogs pa yongs su ma rdzogs par bstan la 'di las ni shes bya'i gnas la

sogs pa rnam pa thams cad stan pa de'i phyir nyan thos kyi theg pa las khyad par du bya ba rnam pa bcus de bzhin gshegs pa'i gsung khyad par du spog pa yin no. mchag nyid kyi phyir yang khyad par du 'phags so. ji rtar mchog nyid yin zhe na mchog nyid du bstan pa'i phyir ro. mchog nyid du bstan pa nyid ji ltar zhe na ji ltar bcom ldan 'das kyis byang chub sems dpa' rnams las brtsms nas bstan pa yin pas so. 'dis ni gdul ba mchog nyid kyi phyir mchog nyid do zhes bya ba'i tha tshig go. 'di ltar gdul ba'i dbang gis kyang bstan pa dman pa dang mchog nyid^{*41} yin te. (1) dper na so so'i skye bo yin pa'i phyir tshong pa ga gon dang mdzes ldan dag gi ched du ni dman pa bstan (2) 'phags pa'i skabs yin pas lnga sde'i dbang du mdzad nas ni 'bring (3) byang chub sems rnams kyi dbang du mdzad nas ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa rnam pa brgyad bstan te. brtags pa'i rnam pa dgag pa'i sgo nas mchog go. (続)

* 1 Don gsang ba rnam par phye ba bsdu te bshad pa (Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā)

: Vivṛtti- in Derge ed. but Vivṛta- in Peking ed.

* 2 拙論『秘義分別撰疏』覚え書(1) 駒沢女子大学研究紀要・第8号所収、pp. 209-216、同『秘義分別撰疏』覚え書(2) 日本文化研究(駒沢女子大学日本文化研究所)・第4号所収、pp. 117-131、同「如来の所分別についての一考察」『秘義分別撰疏』覚え書(3) 駒沢女子大学研究紀要・第9号所収、pp. 199-210、同『秘義分別撰疏』における真如観について 平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会(佛教大学)、2003.9.6、印度学仏教学研究第52号掲載予定。

* 3 今夏の佛教大学における印仏研大会会場にて、大竹晋氏より「Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyāの引用文献」と題する抜き刷り(東方學會「東方學」、第百六輯所収)を頂戴した。

* 4 「確認できない」という意味は、円成実性の、とりわけその真如の実体を見ることなく依他起性を見たとしても、そしてその自己認識があったとしても、本当の意味で遍計所執性を離れたという見解が確認できない、ということである。

* 5 “rang rig pa” の引用は、VGPV の後代成立説を裏付ける。

* 6 「依他起 [性に対して] は自覚がある」という意味は、あくまでも「現量をもって観察する対象が真如であり、円成実性である」という立場が自派では当然の前提となっているので、そうした観点からは「依他起性を見ることは現量ではなく、比量である」という立場をここで明確に宣言しておき、「これでは依他起性と円成実性とは寸分違わないではないか」という更なる批判を予めかわしておく必要があったと想像される。純粹直観智をもって見るのは、どうしても円成実性でなければならず、依他起性であってはならないのである。したがって依他起性を見る時は、世間智のレヴェルではあっても、円成実性という出世間を一度は垣間見たのであるから、「出世間の後得智」という性格となる。

* 7 7MS, Ch. II-4, Ch. II-23, Ch. II-25, Ch II-28における相当箇所。

* 8 anityatādivad vācyo nādr̥ṣṭe 'smin sa dr̥ṣyate / Trīmśikā, K-22cd
(Sylvain Lévi ed. *Trīmśikā*, 1925, p. 40, l. 14, l. 21)

[かくして菩薩道において実現されてゆく完全な実在は、あらゆる存在が] 移ろいゆくというあるがままの如性 (無常性) などと同様 [に、あらゆる存在と別異でもなければ、別異でないのでもない] というように説かなくてはならない。この [菩薩道において実現されていく完全な実在] が、[さよりの知によってあるがままに] 見られるのでないかぎり、かの [他なる条件のままに生成する実在] も [あるがままに] 見られることはないのである。

(荒牧典俊訳「唯識三十論」『大乘仏典』15・世親論集、中央公論社、pp. 165-167)

* 9 de bzhin gshags pa'i gnas skabs na であるから tathāgata-avasthā、すなわち如来という最終段階を示す。

* 10 yong su gcod pa であるから pariccheda、あるいは viccheda, vyavaccheda などに相当するのであろうが、ここはどちらかといえば否定的に判断され、排除されるべき分別や識別、差別のこと。これに対して肯定的に判断されるべき分別は、おそらく rnam par gcod pa と表現されるであろう。

* 11 “gang gi tshe de'i tshe” であるから、“yadā tadā” として訳した。ところでここで言

う「如来にはあらゆる認識判断が存在しないのである」という立場は、他派にすれば「それではもしも真如を把握対象としたならば、ひょっとしたら真如さえも判断出来なくなるのではないか」という疑問が喚起されるであろう。そこで、「いや、そうではないのだ。凡夫の認識判断 (遍計所執) を断ち切った場合に、自ずと真如たる如来が現れてくるのだ。」というほどの、やや強調された意味合いとしてこの一節を補足している。

* 12 MSA は撰衆生戒については菩薩地の戒品に譲る。とりわけ第三のみ突出して重視することは、精神主義偏重との批判を免れないからであろうか。

* 13 citta が引用されるは、智慧重視ではなく三昧重視の傾向にあることを注意しなければならない。

* 14 ここでは5種類の三昧を十地に当てはめている例である。大乘になって三昧が重視されるようになってきたことの証拠であり、VGPV 成立時期の論拠ともなる。MS 本文の第7章を参照のこと。

* 15 実際に四種涅槃が出ている用例は少ない。長尾雅人『撰大乘論』和訳と注解・下巻、p. 302に関連記述あり。ちなみに、一般的には前二者の有余涅槃と無余涅槃が小乗に相当し、後二者の自性涅槃と無住处涅槃が大乘に相当するが、このVGPVでは無住处涅槃こそが大乘の根本であることの理由について追及する立場に立つために、第三の自性涅槃をも声聞に相当させている。真諦も同様の見解を示している。

* 16 MSA : IX 「菩提品」第56偈に対応。

tham cad chos kyi de bzhin nyid / sgr̥ip gnyis dag pa'i mtshan nyid de /

ḍngos po shes pa de la dmigs / mi zad dbang gi mtshan nyid do //

Nep ed, No. 3522..144b, Der ed, No. 4034. 134a

(訳) 一切法の真如は二障から清浄であることを特質とし、事物の智慧とそれを対象とする [智慧とにおける] 無尽なる自在を特質とする。

* 17 煩惱障と所知障の二者を離れることが真如に他ならない立場からは、ただ無住处涅槃のみが大乘に独自の存在としてこのVGPVでは意味が開陳される、という説明である。

* 18 不共、すなわち他との共通性がない仏だけに特有なる十八の特徴。十八不共仏法としての十力 (daśa balāni)、四無畏 (catvāri vaiśāradyaṇi)、

三念住 (triṇi smṛty-upasthānāni)、大悲 (mahā-karuṇā) を指す。AKBh : p. 411、大正蔵29, 140頁。

*19 MSAにおける「身」について、身体という意味の他に無性釈によると bsags pa であると示されるから sammicaya 「積集」と説明する。世親釈によれば āśraya 「依止」、「実(体)」。

*20 MS 第10章、第7節および第9節参照。前註16同様に MSA : IX 「菩提品」第56偈参照。煩惱障と所知障から離れることは、一切法における真如の純清浄であることの特質を意味する。

*21 自性身…眼根等の所依 (rten, aśraya, niśraya)、受用身…眼識等の能依 (brten, āśrita, niśrita)

*22 長尾前掲書によれば、ある観点とは MSA X や「仏地経論」を指す。

*23 「個別相(自相)を有するもの」という見解は、法が「性質」ではなく、「性質を有するもの」という意味になっていることに要注意。

*24 これは自受用身の説明。「ご自身の享受である」との部分は、「…pa la」ではなく、「…par」であることは要注意。

*25 これは他受用身の説明。

*26 長尾前掲書・上巻、序章1 : p. 59, l. 6および序章2 : p. 60, l. 3ff

*27 MS : eṣā sūtrapadadeśanā mahayanasya buddhavacanatvam udbhāvayati. ; 長尾前掲書・上巻、序章2 m : p. 61, l. 2ff および序章3 b : p. 67, ll. 2-3ff

*28 MS : katham punar etena daśaparakār-aviśeṣaviśiṣṭena tathāgatavacanena mahāyānaṃ buddhavacanam eveti paridīpitaṃ na ca śrāvākayānaṃ mahāyānam iti pratiśiddham. ; 長尾前掲書・上巻、序章4 : p. 67, ll. 4-2ff および序章

3 : p. 64, ll. 5-3ff

*29 通常は下に示した図Aの理解であろうが、VGPVによれば大乘の性格は図Bなのであるという主張である。

*30 etāni daśasthānāni śrāvākayānād viśiṣṭāni yāni bhagavatā mahāyāna [udbhāvitāni] viśiṣṭāparamāṇi bodhisattvān ārabhya deśitāni. : 長尾前掲書・上巻、序章3 : p. 64, ll. 5-3ff

*31 大乘になって初めてアーラヤ識説や三性説などが設定されたこと。

*32 brtsams nas は他動詞 rtsom pa の過去形。ひとまず ārabhya と解せば、漢訳では「…の為に宣説せられしことを…」となろう。いずれにしろ、ここでは「菩薩たちを念頭に置いてお説き給うた」と言うわけである。

*33 「律蔵大品」南伝 No. 3 : p. 6, ll. 7-11, TPS : p. 4

「この時、多梨富沙・婆梨迦の二商人、鬱迦羅村よりこの地に至る途上なりき。時に多梨富沙・婆梨迦の二商人に [前世において] 親族血縁なりし一鬼神あり、多梨富沙・婆梨 迦の二商人に告げて言へり。「兄弟よ、ここに世尊は初めて現等覺を成したまひて、羅闍耶他那樹の下に在します、汝ら往きて紗子・蜜丸を以て彼世尊に奉上すべし、利益・安樂を得ん」と、云々。

*34 前回拙論「覚え書(3)」の巻末欠落部分。

*35 “gi” in Pek ed.

*36 “sbyor ba bdang rjes…” in Pek ed.

*37 “sku” in Pek ed.

*38 “sogs” in Pek ed.

*39 “de” in Pek ed.

*40 “bstan chos” in Pek ed.

*41 “mchog pa dang nyid” in Pek ed.

